

し、持たんでいったら濡れるのでどうしようかとか……。もうすぐバレンタインですが、好きな男の子にプレゼントしようか、やめとこうかも意思決定です。

意思決定について脳科学の分野だけで研究してきたわけではありません。身近なことなので多くの学問領域、いわゆる理系文系を問わず古くから研究されてきました。

これから脳の話をするのですが、話のキーワードは、脳の前頭葉と、感情に関係した扁桃体です。扁桃体は、恐怖の中枢といわれています。へびなどをみてビクツとしたとき、扁桃体が活動します(図1)。

ところで、脳科学として感情について研究し始めたとき、人間だけでなく動物にもありそうな喜怒哀楽がまずとりあげられました。

病気で扁桃体が障害された人に、「楽しい顔を描いてください」とか「悲しい顔を描いてください」「びっくりした顔を描いてください」「なにかまずいもの食べたときの顔を描いてください」「怒ったときの顔を描いてください」というときちゃんと描けるのに、「怖いと思ったときの顔を描いてください」といったところ、赤ちゃんが歩いているようなヘンテコな図を描きました。このことから、扁桃体が恐怖を感じたり、相手の表情などから恐怖を読み取るときに大事であることが一九九五年ころにわかってきました。

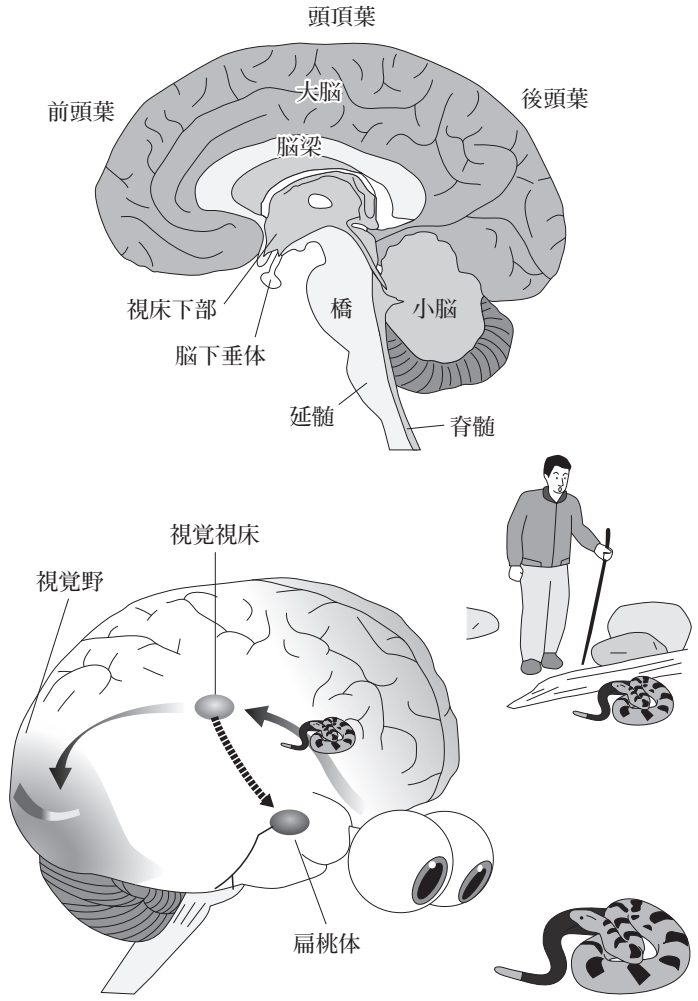


図1 前頭葉と扁桃体

もう一つ有名な症例があります。昔アメリカで炭鉱ではたらいっていたフィネアス・ゲイジさんは、ダイナマイトを爆発させて石炭を掘っていくとき、誤って金属の長い棒が飛んできて、下から頭を貫いて前頭葉が串刺しになりました。一命を取り留めました。が、事故後、もともと責任感が強く、思慮分別があつて、親しみやすい人柄だつたゲイジさんが、なにかにつけてすぐ怒りだし、感情がむきだして同僚への気配りもほとんどなく、なにかを忠告されると我慢できなくなつたり、物事を自分で決めることができなくなつてしまいました。ゲイジさんの友人たちも事故後恐れをなし、「前のゲイジではなくなつた」と語っています。扁桃体と同時に前頭葉が感情や物事を決めたり、性格に非常に大事であることを示唆する重要な症例です。

前頭側頭型認知症の特徴

さきほどの二つの話を私が学生時代にたまたま知つて、不思議だと思つたことが、脳科学に興味を持った一因です。そして、このようなことを研究するようになったきっかけは、医学部を卒業して医者になつたときに担当した患者さんが、前頭側頭型認知症だつたことです。

認知症というと、普通はアルツハイマー病とかを思い浮かべると思います。いわゆる物忘れがどんどん進んでしまう病気です。そのような方が認知症のなかで圧倒的に多いのですが、前頭側頭型認知症という難しい病名の方も一〇%ほどおられます。この認知症でまずやられる部位は、前頭葉です。

アルツハイマー病の患者さんは、ものが覚えられなくなつて家族が心配して病院に連れてくることが多いのに対して、前頭側頭型認知症の人たちでは、最初は物忘れなどがまったくないというか目立ちません。問題になるのは、乱暴になったり、もともと節約家だつた人がどんどんお金を使つたり、パチンコ三昧になったり、万引きしたりすることです。一〇〇程度のものを万引きしたお年寄りが捕まつたというニュースをよく聞きます。そのような方のなかに、この前頭側頭型認知症になつている人がけっこういます。

私が研修医のとき、ある大企業の社長さんだつた人が入院されました。社長さんになるくらいの人ですから、病気になる前は知的でジェントルマンでした。しかし、私が見たときは乱暴で、ちよつとしたことで手がでたり、卑猥な言葉をいったり、反社会的でモラルが欠落したような状況になっていました。これは大変だと思ひ、このような人の